Report レポート

高知県のベトナム人を訪ねて

ー水産加工場、ショウガ畑などで働く若者たちー

湯山　英子（ゆやま　えいこ）
北海学園大学開発研究所 客員研究員

2012年北海道大学大学院経済学研究科博士課程修了、経済学博士。北海道大学大学院経済学研究院助教、地域経済経営ネットワーク研究センター研究員を経て北海学園大学客員研究員。専門は日越経済関係史、移民研究。

昨年秋に高知県を訪問しました。高知市に拠点を置く監理団体・登録支援機関のゴールデン・トップ協同組合（以下、「G監理団体」という）の人たち、そしてベトナムからやって来た送り出し機関のSAO VIETの職員と共に水産加工会社などで働くベトナム人を訪ねました。

高知県の在留外国人は、法務省（出入国在留管理庁）の統計によると5,038人（2022年６月末現在）。国籍別では、ベトナム人の1,356人が最多で、在留資格別では技能実習と特定技能の割合が高く、北海道と同じような傾向を示しています。私はこれまで、北海道のベトナム人調査を通して、かれらの生活実態や課題を本誌面で報告してきましたが、対象は道内だけでした。しかし、今回の高知県訪問によって、北海道特有の問題と思っていたことが、他でも同様の問題を抱えていることや、高知ならではの課題などを知ることができたことで、北海道を逆照射することができました。

時給は北海道よりも低い

同行させてもらったG監理団体の担当者は、「高知は給料が安い」としきりに強調していました。高知県の最低賃金は、853円で全国の最下位。北海道の920円は、高知から見ると高いことになります（2022年10月１日から）。技能実習生の残業代を含む給料は、G監理団体の日本人職員の給料より高いときがあったり、業績のいい会社はかなりのボーナスが出たという例もあるそうです。

ある水産加工会社に、「日本人従業員との給料の差が、互いの軋轢（あつれき）の原因とならないのでしょうか」と質問すると、「高齢の従業員と比べると1.5倍は働くので、それは皆がわかっている」という返答でした。これは、今回訪問したあちこちの事業者からも聞かれ、かれらの働きぶりの評価は高いと感じました。「かれらなくしては、作業が回らない」という言葉が、受け入れた事業者から何度も発せられました。

技能実習から特定技能資格への変更について、「時給の高さ及び都会への憧れ」が県外への移動動機と

なっているとよく指摘されていますが、高知県では北海道より時給が低いことから、さらに厳しいかもしれません。県内に引き留める要因を別のことに求めなければならないという課題があります。北海道と比較すると、有利なのは気候が温暖であること、ベトナム人が好む果物が豊富にあることでしょうか。もう一つあえて挙げるならば、近所の人たちの「おせっかい」や「しんせつ」があるようです

日本語の習得

「コロナ以降に入国になった技能実習生は、日本語の能力が低いことが指摘されていますが、その通りです。ベトナムでも感染者が増えたことで、オンラインによる日本語学習では、思うような習得が難しかった」とG監理団体の担当者（役員でもある）松坂伊津さんが、事業者に説明していました。１ヵ月の入国研修を高知市で行うのですが、最低限の日本語を覚えて県下の事業者の元へ行くことになります。

高知県では、地域での日本語学習の機会は少ないということでした。ベトナム人技能実習生を受け入れたタカシン水産の前田雅裕工場長は、「近くの港でインドネシア人に日本語を教えている知人がおり、工場と寮のある集落に住んでいるため、その人に依頼してみよう」と言っていました。仮に日本語教室があったとしても、交通アクセスが不便な地域では、教室に通うことは難しい。北海道でも同じ問題を抱えています。

母国では引きこもり、技能実習から特定技能へ

「貧しい国、ベトナムから日本に働きに来た」というかれらに対する認識は、北海道でもよく耳にします。長年、ベトナム人と接してきた松坂さんによると、「ベトナム人でもZ世代と言うのでしょうか、明らかに家族に送金しなければならないという働く動機は、少しずつ薄れています」と言います。高知のショウガ生産会社で働く実習生は、「家でゲームばかりしていたので、母親が積極的に日本で働くことをすすめた」という理由で来日しました。かれは、農業の仕事を通してしっかりたくましくなり、５年の実習期間後も同じ職場で特定技能１年目となりました。ショウガ畑から走って来るかれを見たときは、引きこもりだったなんて思いもしませんでした。

かれの生活は、昼間は畑で汗を流し、寮に帰るとゲームをするという生活。特定技能２年目には、時間給を上げてもらう要求を、G監理団体を通して事業者に交渉しました。結果、1,107円で合意。当初はアパートでの一人暮らしを希望したことで、職場が同じ会社の高知市内の事業所に変わることになり、それに対して、「今のまま田舎の方が、近所の人たちが親切なので、寮生活でいい」ということになりました。ベトナム人のかれにとっては、今のゲーム環境と親切な近所の人たちが、そこに留まる理由となったようです。

地域住民として

学校給食用の冷凍切り身やマグロ・金目鯛の加工をするタカシン水産では、昨年はじめて３人のベトナム人技能実習生を受け入れました。工場のある集落には、アパートがないため古い一軒家を会社が用意しました。初の外国人ということで、その集落では住民から「説明会を開いてはどうか」という意見があったそうです。水産会社社長が地元の出身であることと、工場長が集落の家を一軒一軒回り、説明に歩いたことなどから、「あそこの会社なら」ということで近隣住民からの合意を得ました。

前田工場長によると、「区長が、外国から来たばかりの若い人から自治会費（町内会費）を取るわけにはいかない」と３ヵ月間は無料となったそうです。その

大きい魚をさばく技能実習生

後、徐々に地域での生活に慣れてきたことで、自治会費を徴収することになり、工場長に「どのように説明するのですか？」と問うと、「ゴミの収集や街灯など自治会が負担していることを説明する」と言っていました。年会費6,000円なので一人2,000円の負担になります。これを機に、集落の運動会にかれらも参加しました。

また、寮のすぐ近くに住んでいる水産会社OBが、かれらの世話役となり、敷地内に畑を作る手伝いをしてくれています。あるときせっかく育った南国野菜が鹿やイノシシに荒らされてあまりにもションボリしていたので、会社の人たちが漁網などで畑を囲うなどして、世話を焼いています。

G監理団体の松坂さんによると、ほかの地域では、技能実習生に地域住民として消防団に入ってほしいという要望もあるそうです。ただし、本人が入団を希望しても、技能実習生の場合は、消防団員として支払われる報酬は受け取ることが出来ないのです。これも外国人技能実習機構に問い合わせて得た回答とのこと。本人たちが消防団参加を快諾している以上、松坂さんはかれが報酬なしで参加する方法を模索しています。

また、訪問したときは柿の季節でもあり、干し柿の作り方を近所の人に教わっているところもあるそうです。さらに、土佐清水市中浜の地域イベントでベトナム料理を実習生たちが提供するという企画もありました。松坂さんも高知市から駆けつけました。

技能実習生同士のいさかい

北海道で働くベトナム人の宿舎は、年々個室が多くなっていることを実感しています。一軒家をシェアするケースが多いのですが、最近訪問した北海道の紋別市では一人一部屋の寮が次々と新築されていました。今回の高知県の事業者もまた、一軒家とアパートの両方を用意していました。二人暮らしの一軒家では、自分たちの写真を壁に飾ったりして生活を楽しんでいる様子が見られました。庭には、レモングラスなどベトナムではお馴染(なじ)みのハーブ類が植えられています。

松坂さんは、入国研修時に台所の掃除を徹底して教えているそうで、今回訪問した男子寮はどこも見事なくらい台所がきれいになっていました。ゴミの出し方から、掃除まできちんと教えているようです。

ベトナムといっても南北に長い国であり、北部、中部、南部で気質が異なります。また、宗教も仏教徒が多いとはいえ、カトリック信者も一定数います。職場でも一緒、そして集団生活となると、いろいろな理由からいさかいが生じることもあります。G監理団体では、トラブルがあると真っ先に寮に行き、聞き取りをしています。個々の性格を把握しているようで、今、かれらの間で何が問題となっているのかを本人からも、事業者からも聞き取りを行い、場合によっては寮を増やすよう事業者に提案するなど、テキパキと対処していました。「自分たちの子どもみたいなもの」という言葉が何度も発せられ、高知の女性はよく働くし、瞬時に問題解決に対応しているのを肌で感じました。女性が働き者というのは、ベトナムとよく似ています。

監理団体とベトナムの送り出し機関が、技能実習生と仕事や生活について面談中

だまされる

G監理団体の役員でもあり、通訳もする安藤厚夫さんに相談が入りました。「健康保険証を写真で送ると、スマホがタダで入手できる」ので送ってみたという技能実習生からのビデオチャットでした。事件に巻き込まれ、警察から事情聴取を受けたようです。カラクリは、その健康保険証を使ってまったく知らない人からお金を借りられてしまう。そんな詐欺が今、流行っており、問題となっています。

かれらの「浅はかな行動」と思われるかもしれませんが、若い子が高額なスマホを保険証の写真一枚で簡単に入手できるとなると、飛びついてしまうでしょう。「安心な日本」と思われていますが、ネットの世界では、日本にいてベトナム語による危険が常に横行しています。G監理団体では、こうしたトラブルを回避するためにも、気をつけるよう注意を呼びかけています。

通信制大学で学ぶ道

監理団体の存在を問題視する風潮もありますが、監理団体の担当者の奮闘ぶりは、事業者との調整だけでなく、実習生としての３年間の成長に関わり、かれらの将来をも引き受けることになります。担当者レベルでは、生身の人間を相手にその問題の対応に、燃え尽きることも多いようですが、「お互いの希望を調整し、うまく着地点を見つけたときのやりがいは大きい」と松坂さんは言います。何より、一人の人間の成長を目の当たりにできるか否かは、事業者の待遇や、地域の人たちの支援にかかっている部分があります。

もう一つ、励みになるエピソードがありました。技能実習から特定技能に移行したものの、高卒では技人国※として働くには、学歴の壁があります。そこを何とかクリアして、キャリアアップを目指そうと、2022年春から関西にある通信制大学の商学部に入学したベトナム人女性が山陰にいます。G監理団体では、本人の希望を叶（かな）えるために、働きながら勉強できる大学への入学の道を探し出しました。そして、地元で家庭教師を買って出た会計士のサポートでレポート作成対策とその後の勉強に励んでいるそうです。

北海道でも夜間高校に通う技能実習生の事例や、技能実習生から北見工業大学の大学院に進学した例などがあります。かれらに向けられる「一時的な出稼ぎ目的でしょう」という視線がある一方で、日本で働き、その過程のなかで、人生の目的が見つかる場合もあります。短期のつもりが、定住した例が多くなっています。そうした人たちに開けた国（社会）でありたいし、手助けもしたいという思いを高知で共有しました。

ニンビン省出身の技能実習生（左）。ベトナムの送り出し機関、日本語教育センター長（右）の訪問にショウガ畑から走ってきました

ベトナムとの国際関係

今回、高知県を訪問したとき、ちょうど隣の愛媛県松山市のニュースが流れていました。ベトナムの南部にあるベンチェ省の人民委員会と地域連携「経済協力に関する覚書」を締結し（2022年８月）、10月末にビジネス支援セミナーを開催したという内容でした。ベンチェ省は、ベトナム南部のメコンデルタに位置しています。ココナッツの産地として知られ、果物も豊富。北海道でもこのベンチェ省から技能実習生として働きに来ている女性に会ったことがあります。

北海道の旭川市もまた北部のクアンニン省と都市間連携を進めています。2023年度から公立に移行する旭川大学とクアンニン省にあるハロン大学との交流がスタートし（2022年11月６日「朝日新聞」北海道版）、人的交流が活発化することになります。全国の地方都市でも、今後、ベトナムとの地域間連携や人的交流が進んでいくことでしょう。その契機となったのは、技能実習生らのベトナム人の存在が大きいと思います。コロナ禍で人的移動や交流が一時停滞したものの、北海道においてはベトナムを始めとする東南アジアとの交流は欠かせない動きとなっています。全国的な流れのなかで、北海道がどうベトナムの地方都市との関係を築いていくのか気になるところです。そこには、北海道に住むベトナム人の若者たちと私たちの関係性が重要になってくると感じています。

※ 在留資格「技術・人文知識・国際業務」。